

19世紀後半における田園墓地の 西部への進出

——ピクチャレスクな景観の変容——

黒 沢 眞里子

専修人文論集 第72号 抜刷

2003.3

19世紀後半における田園墓地の 西部への進出

——ピクチャレスクな景観の変容——

黒 沢 眞里子

はじめに

これまでアメリカの田園墓地の研究において、田園墓地の西部への進出を文化的・地理的・時間的推移の観点から研究したものはほとんどなく、わずかに、グンサー・バースの「公園墓地——その西部への普及」があるにすぎない。バースは、東部に始まった田園墓地が西部に進出していく過程を、墓地景観における自然と文明のバランスの逆転として捉え論じているが、自然対文明という視点に重点が置かれ、ピクチャレスクな墓地景観の具体的な内容については語られていない¹⁾。しかし、田園墓地の「自然」は当初から、自然そのものではなく、ピクチャレスクな景観を生み出そうとする意図のもとにデザインされた人工の「自然」であることを考えると、西部における墓地の変容についても、建設プランを含めた景観そのものについての具体的な検討が必要であるといわねばならない。田園墓地 (rural cemetery) を公園墓地 (park cemetery) と呼ぶことにすでにバースの論考の問題点があり、筆者の知る限り少なくとも19世紀前半の文献において公園墓地という表現が使われた例はない。むしろ、田園墓地が追求したピクチャレスクな景観が、西部で出会った新たな自然の要素——たとえば、沼地や乾燥した土地など——を取り込む過程で変容し、シンプルで明るく開放的な公園型景観へと進化していったと考えるべきである。

本論はこのような立場から、オハイオとカリフォルニアの調査に基づき、ピクチャレスクな田園墓地の景観の変容を通じて見た西部における田園墓地の特性について考察する。まず最初にとりあげるのは、オハイオ州シンシナチのスプリング・グローヴ霊園²¹である。この霊園は景観芝生プラン (landscape lawn plan) と呼ばれるモデルを生み出し、その後の墓地景観や都市公園や郊外住宅地のデザインにも大きな影響を与えた。スプリングとは泉のことだが、この地はその三分の一が湿地であった。沼地の改良を含め、個々の要素を墓地景観全体にいかに取りこみ、革新的な墓地を誕生させたか詳しく見ていきたい。田園墓地在がさらに西部に普及し、カリフォルニアに達するとピクチャレスクな枠組み自体が成り立たないような自然——極度に乾燥した不毛な土地——が待ち受けていた。霊園の設計者たちはもはやデザインだけで解決することが不可能な気候・土壌にどのように立ち向かったのか、サンフランシスコ近郊オークランドのマウンテン・ビュー霊園をとりあげ考察したい。

1. オハイオ州のスプリング・グローヴ霊園

マウント・オーバーンをモデルとして

田園墓ちはイギリス風景庭園のデザインを取り入れそのピクチャレスクな景観が評判となり全米に広がっていったが、19世紀の半ば西部へと普及する過程でその景観に重要な変化が生じた。それまでの不規則で変化に富んだメランコリーな景観から、シンプルで明るい開放空間が追求されるようになったのである。墓地景観に新機軸を打ち立てたのは、オハイオ州シンシナティに1845年に設立されたスプリング・グローヴ霊園である。現在のアメリカの墓地の多くはメモリアル・パークと呼ばれる、芝生の開放空間と低い墓石あるいは地面に埋め込まれたプレートが特徴の墓地である。そのモデルとなり後の墓地景観に多大な影響を与えたスプリング・グロー

ヴがどのような過程を経て新しい墓地のモデルとなったのかまず見ていきたい。

オハイオ州シンシナティは7つの丘に囲まれたオハイオ川流域の低地に位置する都市である。1832年のマイアミ・エリー運河の開通以来大きく発展し、1840年代シンシナティは全米で第6位の大都市へと成長した。人口も、1840年の46,000人から、45年には70,000人、50年には115,000人と跳ね上がった。²¹ ロングフェローによって「西部の都市の女王」と呼ばれた美しい文化都市シンシナティを悩ませた問題は、東部の諸都市と同様に市街地の墓地問題であった。19世紀初期には23の宗派別の墓地が存在したが、40年代になると比較的大きな墓地も満杯状態になり、市街地の墓地は年々荒廃し醜悪となった。¹¹ 町の富裕層は、1840年代よりこのような混雑した低地の市街地から広々とした眺望と新鮮な空気を求めてクリフトンと呼ばれる丘に彼らの住宅を移動しはじめていた。すでに財をなした町のエリートたちは、カントリー・ジェントルマンとして園芸に強い関心を持ち自分達の環境をイギリス庭園の理論にのっとり改良したいと考えていた。

中西部の町シンシナチのエリートたちが文化都市を創造するうえで模範としたのは、ほかならぬ東部のボストンだった。サンフランシスコが近代都市として成長しつつあるときに自らを「西部のアテネ」と呼んだように、シンシナティも「西部のアテネ」となることを目指し、「アメリカのアテネ」と呼ばれていたボストンをモデルとして、革新的な文化施設・制度を積極的にとり入れた。⁵¹ マサチューセッツ園芸協会をまねて1843年シンシナティ園芸協会が設立されるや、彼らが中心となり墓地の改革をすすめた。彼らは東部の有名な田園墓地と連絡をとり、地図や規則など墓地設立に必要な情報を手に入れ、また実際にボストンのマウント・オーバーンの他、フィラデルフィアのローレル・ヒル、ニューヨークのグリーンウッドなどを訪れている。⁶¹

墓地用地も、彼らの邸宅と同様町から十分離れた不快な煙りや騒音のない郊外でピクチャレスクな景観が実現できるような変化に富んだ地形を求め、町から4マイル北に位置する166エーカーの土地を16,000ドルで購入、この土地の特徴である森と泉にちなんでスプリング・グローヴ霊園と命名し、まだレイアウトも終わらない1845年8月28日、奉獻式⁷⁾をとりおこなった。

近代的管理の象徴となった柵

これまでの経緯をみればスプリング・グローヴは、ボストンのマウント・オーバーンが確立した形式をそのまま引き継いでいることは明白である。このような形で、田園墓地は西部に広がっていったのである。しかし、その内容を仔細に吟味してみると、微妙だが重要な意味をもった変化に気づく。

例えば、霊園の奉獻式で読み上げられた連邦最高裁判事ジョン・マックリーンの演説は、奉獻式の演説の先例をつくったマウント・オーバーンのジョセフ・ストーリー判事の演説をおおむね踏襲している。しかし、それだけではなく古代の埋葬方法からパリのペール・ラシェーズまで一般的な話を展開するなか、突然具体的な墓地のレイアウトの話になり、園路や植栽に触れ最後に「この場所は塀か柵で囲み、簡単に通り抜けできないようにする⁸⁾」と述べ、そのうえでこの美しい場所は、人々の道徳心を高める安らぎの場となるだろうと述べている。ピクチャレスクな景観の精神的な効用とともに物理的なレイアウト、特に柵に言及されていることに注目したい。

柵については、1849年に発行された『スプリング・グローヴ霊園の認許状、定款および規則』も触れている。市街地の墓地が資金不足で墓地の維持や改善ができず、将来、墓地が荒廃して閉鎖され他の目的に使われるのではないかという恐れがある。恐れをさらに強化しているのは「それら

(墓地)を取り囲むこわれやすい柵の破損した状態だった。⁹⁾このような光景は来訪者たちの心痛をもたらす原因となっているというのだ。田園墓地において柵は重要な意味がある。そもそも墓地を郊外に移動させると死体泥棒などに荒らされる心配を払拭するために、田園墓地では、それまでの墓地とは異なり周りを柵で囲み、墓地の管理人を常駐させることにしたのである。柵は、安全で管理が行き届いた田園墓地のシンボルであり、そのなかでピクチャレスクな景観を展開させる枠組みの役割も果たしていた。したがって、柵の破損は、物理的な現象以上に、心理的な痛みを伴っているのである。

また、田園墓地はこれまでの墓地のように簡単に移動させられることなく墓地として永久に存在できるように、墓地を所有する方法を採用した。¹⁰⁾墓地はまず囲まれ聖化された。柵は、墓地に所有の概念が持ち込まれたことの象徴でもあった。墓地を所有する個々の家族も自分達の墓地区画のまわりに鉄柵を設けるようになり、二重の柵が象徴的に存在するようになる。スプリング・グローヴは霊園を囲む柵に改善を加える一方、個々の墓地の鉄柵を取り払い近代的な墓地のモデルとなった。これにはどのような意味があるのか後に詳しく述べたい。

東部と地元的设计家の限界

スプリング・グローヴの設計では当然マウント・オーバンのピクチャレスクな景観をモデルとしたが、どういうわけか理事会がその設計者に選んだのはフィラデルフィアのローレル・ヒル霊園(1836年設立)をデザインしたジョン・ノットマン(1810-1865)であった。その堂々とした古典主義的な門からもうかがえるように、霊園のデザインはピクチャレスクというよりも幾何学的でフォーマルな様式を特徴としていた。

ノットマンは依頼を受けるとシンシナティを訪れ、現地を簡単に調査してフィラデルフィアに戻り、そこでプランを作成し郵送した。¹¹⁾理事会は最

初はノットマンの案を受け入れるが、最終的には却下してしまった。ローレル・ヒルの設計で東部で名声を確立していたノットマンのデザインがスプリング・グローヴの理事会で受け入れられなかった大きな理由は、沼地に関わるものだった。ノットマンは、この土地の特徴である沼地を無視してそこを埋葬地としてデザインしてしまったのだ。園路計画でもローカルな地形を無視した幾何学的過ぎるレイアウトとなっていた。

理事会は地元の設計家ハワード・ダニエルズに再度設計の依頼をおこなった。理事会は自然の地形を生かしたマウント・オーバーンのようなレイアウトを望んでいたのも、ダニエルズは、マウント・オーバーンのレイアウトを行ったヘンリー・A・S・ディアボーンの方法を直接の範とすることにした。実際の地形を無視したノットマンとは違い、ディアボーンのレイアウトでは自然の地形をそのままなぞる形で、なだらかな登り下りのある蛇行する園路がデザインされていた¹²⁾。ダニエルズは園路に、「周遊」(Tour)という言葉を用い、一度来た道に戻ることなく園内の見晴しのよい景色を楽しめるようにした。丘と丘の間の自然な水路となっている窪地などの地形を注意深くたどり、墓地用地としてふさわしくない土地を巧みに利用して、園路をレイアウトしていった¹³⁾。彼はマウント・オーバーンのピクチャレスクな墓地景観を忠実に再現したのである。

東部のモデルがいかに忠実に再現されたかは、ダニエルズの個人的な好みでメイン・アヴェニューから複数の道に別れる場所に噴水を置く提案が拒否されたことからよくうかがえる。噴水は「ピクチャレスクというよりもフォーマルで都会的であり、東部の『田園』墓地に先例がないために」受け入れられなかったからである¹⁴⁾。

ところで、ノットマンが墓地用地としてレイアウトした沼地はどうなったか。ダニエルズの造成計画には資金・労働力の問題もあり沼地の処理までは手がおよばなかった。入り口から広がる低い沼地はそのままの形で、地元の農家に家畜の放牧地としてリースされていた。

コスモポリタン——アドルフ・ストラウフの設計

東部のランドスケープ・デザイナーも、地元の設計家も沼地をピクチャレスクな枠組みに取り込むことはできなかった。それを成し遂げたのは東部でも西部でもなく、ヨーロッパからやってきた若きランドスケープ・デザイナー、アドルフ・ストラウフ（1822-83）であった。プロシア生まれのストラウフはヨーロッパ各地で造園の修行を積み、1848年イギリスに渡り王室植物園リージェント・パークに職を得た。ここで、偶然シンシナティからやってきた商人ロバート・B・ボウラーに庭園を案内したのがきっかけで、ストラウフが「世界を見るために」アメリカにやってきたときボウラーとシンシナティで再会した。

ストラウフは、ボウラーの屋敷に招待され、その景観デザインを依頼されることになる。彼の屋敷はシンシナティの裕福な人々が市街地から移り住んだクリフトンという前述した丘の上にあり、ボウラーはここに西部のどこにもないようなパーク・ヴィラをつくることを夢見ていた。ストラウフは、結局ボウラーのヴィラだけでなく他のヴィラも手掛け、クリフトンはパークのような美しい景観となり、1860年、ここを訪れたイギリス国王エドワード7世（当時は皇太子）に、イギリスのパークやヴィラを思いださせるような美しさだと言わしめたほどだった。¹⁵¹

ストラウフはこのような上流階級の人々との付き合いを通じてスプリング・グローヴの監督となり、28年間さまざまな改良を行い、現代墓地のプロトタイプとなるような画期的なプランを実行していくことになるが、その前に丘の上のクリフトンをパーク・ヴィラに変える仕事をしていたことは重要である。というのも、彼が心に描いていたグランド・デザインは単に墓地だけではなく、丘の上のヴィラも含めた壮大なヴィジョンを内包していたからである。その壮大なヴィジョンの靈感を得たものは、ほかならぬ東洋であった。そしてそれは当時欧米のナチュラルリストや画家たちに多

大な影響を与えたドイツ人自然科学者アレクサンダー・フォン・フンボルトの「コスモス」を通じて知ったものだった。「コスモス」は清の皇帝乾隆帝が満州の首都瀋陽にある先祖代々の墓地を称える文章を紹介していた。¹⁶⁾そこでは、住宅は丘に墓は谷に配されていた。シンシナティでもこの方法をまねることができる¹⁷⁾とストラウフは考えた。

沼地の改良

スプリング・グローヴは、東部の田園墓地を忠実に再現したシンシナティの誇りであったが、ストラウフが指摘したように、いくつかの問題が生じていた。その一つは、霊園の敷地の三分の一を占める例の沼地の処理だった。ストラウフは監督に就任するやいなやこの問題に果敢に取りかかった。まず、この土地をリースしていた農家との契約を終結させここから立ち退かせた。沼地の土を掘り起し起伏のある土地をつくり、複数の池をつくる作業を行った。地表には芝を植え、池の中にはいくつかの小さな島をつくり、珍しい樹木や灌木を植えた。池に水鳥が放されるが、これは噴水とともに水のよどみを防ぐことを目的としていた。また小さな島や深い入り江をつくり、灌木で池のボーダーを隠して池を実際よりも大きく見せる工夫がされた。堤には灌木を植えずにより光を取り入れ澄んだ水が保たれるような工夫がされた。¹⁸⁾

こうしてストラウフは目の錯角や噴水や水鳥を利用した水の浄化など科学的なランドスケープ・デザインにより沼地を「霊園のなかでもっとも美しい場所」¹⁹⁾に変貌させた。(図版1)しかも、美しい景観の創出によって、財政的にも大成功を収めた。周りの墓地区画の土地が値上がりし、高い値段で販売することができたからである。実際ストラウフは、沼地の造成費用を10万ドルと見積っていたが、新たに造成した埋葬地の収入によって霊園の負債もカバーする収益をあげると予想していた。結果は7年で50万ドルという予想以上の売り上げを記録した。²⁰⁾これは景観の美化がいかに土地



図版1 20世紀初頭のスプリング・グローヴの絵葉書

の値段を釣り上げるか墓地経営者たちに強く印象づけたと思われる。ストラウフの伝記を書いたH・A・ラターマンは、芸術的な仕事ではなくこの財政的な成功によってストラウフの地位は確固たるものになった、アメリカ人は金で人を評価するものだと述べている。いずれにせよ、ストラウフの沼地の改良がいかに成功を納め霊園側を喜ばせたか、理事会が池の島のひとつをストラウフ一家に贈る決議をしたことから明らかである。

柵の除去と墓石の制限

次にストラウフが行ったことは、霊園を取り囲む醜い柵や壁を取り去ることだった。放牧地の境界には高い木の柵があり、搾乳場を隠すために石の壁がつくられていた。これらは入り口からのドライヴウェイを暗く陰気なものとしているので、これらを改善して明るい雰囲気にしよというのだ。アメリカの墓地はヨーロッパと異なり、周りに高い柵を設けることをしないのが特徴となっている。これは、住宅地においても同様であり、オープンな空間を演出することを好む伝統がある。マウント・オーバーンでも墓地の周りだけでなく、家族の区画も鉄の柵などで囲むことが行われるようになり、墓地に所有の概念がもちこまれていると当時から批判の声

もあった。バーバラ・ロタンドも指摘しているように、それが腰までの高さしかなく、他人を排除するというよりも、他人の視線を意識していることに注意しなくてはなら²²⁾い。

また、園内の埋葬地にも問題があった。レイアウトは計画的でなく数千人の人々がそれぞれ思い思いの好みで墓を飾っていたので、園内にも醜い生け垣や鉄の柵が溢れ、多くの記念碑が林立していた。このような自由放任からくる雑然とした状態からいかに調和を得るか、それがストラウフが取り組んだ一番の課題だった。まず、園内の鉄柵や生け垣などを一切禁じ、一旦撤去したものは再び設置することを禁じた。家族の区画は記念碑を一つとし、それ以外の墓石は芝刈りの邪魔にならないように地面より数インチの高さとした。ストラウフは、墓地景観から邪魔なものをいっさい取り除いてシンプルな美を追求したのであり、墓地の装飾・美化のすべてを墓地監督者の管理下に置き監督者の許可なくしていかなる記念碑も建てられないことにした。ストラウフはこのようなシステムを確立するに際し、単に美的な観点からでなく、鉄柵の維持（鉄柵は錆びないように定期的に塗り替える必要があった）など経済的な観点からも理事を説得した。

このような大胆な改革に対して当然反対する声もあった。そのほとんどは鉄の柵や墓石のメーカーなど個人的利害から反対する者たちだった。もっとも議論を呼んだのは、将来墓石は芝生と同じ高さにするという規則だった。これに対しては、個人の私有地において伝統的な形で死者を弔う権利への侵害だと反対する声があがった。²³⁾ 反対者たちは外国人排斥のレトリックを使い、ストラウフのコンセプトが異教徒的で反アメリカ的な思想から生じているとして彼の計画に反対した。1858年10月、理事を選ぶ選挙の時に突然配布された訴えには、追悼の場である墓地を遊びの庭とし、キリスト教の墓地を異教徒的な場にするために、また先祖の古くからのよき習慣を破壊する目的でヨーロッパから反アメリカ的な奇妙な思想がもたらされた²⁴⁾と書いてあった。

個人の墓に設けられた柵は私有財産であるためにストラウフに撤去する権限はなかったが、荒れた墓地の問題もあり、1870年墓地所有者の要求として理事会の決定により取り除かれることになった。²⁵⁾

ストラウフは、執拗に趣味の悪い記念碑を拒否し続けた。彼は、墓地区画所有者たちは、ただ石を売ることに関心のある人間の忠告ではなく、「正しい趣味」をもった人間の忠告に従うべきであると説いた。ストラウフの伝記を書いた同じくドイツ系アメリカ人で米独関係史を専門とした歴史家のラターマンは、「正しい判断力」はすべての人間に備わるものではなく、卓越した種にそなわるように限られた人間に与えられ、それが芸術を生み出す秘密の力となっていると述べている。ストラウフ自身がそこまで考えていたか知ることはできないが、ストラウフの正しい趣味で統一され美しく調和のとれた景観の探求は、同時代のオームステッドとも共通した理想社会の探求の一環でもあった。

このようにストラウフが求めた景観の視覚的統一という考え方はどこから生まれたのか。環境デザインを研究するノエル・ドーゾー・ヴァーノンによると、ストラウフは、シンシナティにやって来たときすではっきりとしたランドスケープ・デザインの理論をもっていた。²⁶⁾彼の考え方に大きな影響を与えたと考えられているのは、ストラウフと同じプロシアのピュックラー・ムスカウのパーク・デザインの理論であり、スムカウの著書『ランドスケープ・ガーデニングの手引き』であった。視覚的な統一性はこれまでの田園墓地のピクチャレスクな景観には見られない新しい概念であった。霊園全体を一服の絵と考えると、そのなかに配置する建物や記念碑や植栽を注意深くプランニングするとう考え方である。よく茂った植物など複雑さのなかに統一を、そこに視覚的なドラマがあることが大切であった。道のレイアウトも絵の全体を鑑賞できるように工夫がされていた。突然行き止まりとなって訪問者を驚かすのではなく、ムスカウが述べているように「見えざる手に導かれるように、もっとも美しい場所」に向かわせ

るようにデザインされなくてはならなかった。²⁹⁾

個の統一^{オーガナイザー}体としての芝生

ピクチャレスクな絵画では、光と空気が個々の細部を統合し「全体的効果」を生み出す役割を担った。³⁰⁾ ストラウフの景観で全体を統一する重要な要素は何であったか。それは、20世紀アメリカの景観のもっとも特徴的な要素となる芝生であると筆者は考える。ストラウフが行った墓地景観の革命は、記念碑や墓石やその他の障害物を可能な限り取り除き、広々とした明るい開放空間を設けることであり、そのために不可欠だったものが広々とした芝生であった。ストラウフ自身も、これを「景観芝生プラン」と呼んでいる。スプリング・グローヴ以後、景観芝生プランは近代的な墓地景観のモデルとして広く普及していった。

19世紀後半はアメリカの裕福な住宅のまわりに芝生が現れ、これが20世紀になるとフロント・ローンと呼ばれる芝生の前庭をもった中産階級の典型的な住宅形式となるが、芝生がアメリカ文化の重要な要素として裕福な家に登場したのがこの時期であった。³¹⁾ 芝生の普及に欠かせない芝刈り機も登場し、1868年から73年まで38の特許が登録されている。芝生は東部で関心をもたれていたが、オハイオ州はニューイングランドからの移住者によって建設された州なので、同じく芝生への関心が高かった。³²⁾ 芝生がアメリカの裕福な住宅に取り入れられたことは、クリフトンの例が示すように、芝生で囲まれたイギリス貴族の屋敷をアメリカに実現したい欲求から生まれたものであった。芝生は富と趣味のよさを誇示するための媒体となっていくのである。芝は元来家畜の餌として植えられていたものであり、したがって家畜が勝手に出入りしないように柵が必要だった。芝生から柵を取り外したことは、家畜を飼うためでなく、非実利的な目的のために芝生が使われ始めたことを示している。この変化を端的に示しているのがまさにスプリング・グローヴであり、前述したように沼地の草地から家

畜を追い出し、柵も取り除かれ、柵のない広々とした芝生こそが、富と洗練された文明を表す記号となった。このように文化的意味を付加された芝生は、気候的に不適切な乾燥したカリフォルニアにも、文化の証として無条件で移植された。それが大きな障害となり、後述するように、カリフォルニアの景観の設計を依頼されたオームステッドと依頼主との間の大きな争点となった。

近代的管理を可能にする新たな測量技術の開発

芝生が個々の要素を全体プランに統一する上で重要な役割を担ったことを見てきたが、筆者の調査によれば、デザイン上の革新に加え、技術的な進歩も中央集権的な管理方法を可能にした。1849年に発行された『スプリング・グローブ霊園の認許状、定款および規則』の霊園設立の経緯を詳細に検討したところ、これまでの田園墓地では述べられていないことが強調されていることに気づいた。設立の経緯を述べた最後で、スプリング・グローブの測量は世界のどの墓地よりも正確で完全であると述べているの³³⁾だ。正確であるとはどういうことか。それは墓地全体がきわめて正確な測量技術を用いて測量されたことだということが分かった。そして、それは三角測量という新しい測量方法であったが、その正確な測量技術は、蛇行する園路や多様な自然の地形のなかに点在する何千もの私有財産を正確に管理することを可能にした。この測量を行った土木技師は、「霊園のなかのすべての区画の目印が壊されても、この記録からまったく同じように目印を置くことができる。これは、……合衆国のどの霊園でも行えるものではない」と述べている³⁴⁾。

このことは、近代的な墓地が園内の雑多な私有地を全体の管理下におくシステムを確立するうえで重要な技術的進歩を示しており、それが、ストラウフの景観改革により現代墓地のプロトタイプとなったスプリング・グローブのレイアウトで始めて採用されたことは重要な意味をもってい

る。視覚的統一を重視するピクチャレスクな景観は、単にデザイン上の問題からだけでなく、技術的進歩も含めたより大きな社会的文脈のなかから生じたことを示唆しているからである。より正確な測量技術は、それぞれの私有財産のまわりにいわば「見えない柵」を設け、視覚的に統一された景観を実現させる支えとなったといえる。スプリング・グローヴ以後、墓地区画所有者に代わって墓地監督者が墓地の管理・運営で強い権限を握るようになり、全体的な目的のために個々の墓地所有者の自由が大幅に制限される状況が加速されていくのである。

2. カリフォルニア州のマウンテン・ビュー霊園

スプリング・グローヴをモデルとして

スプリング・グローヴ霊園をそのままモデルとして、1865年5月に設立されたのが、オークランド市のマウンテン・ビュー霊園である。この事実はあまり知られていないが、ニューヨークのセントラル・パークの設計で一躍脚光を浴びることになったフレデリック・ロー・オームステッドが設計を手掛けた墓地である。19世紀の墓地設計で特徴的なこととして、当代屈指の造園家が霊園設計に関わっていることはもっと注目されている。それにより、スプリング・グローヴの例にも見られるように、墓地が話題を集め、公園や郊外住宅地など公共空間のデザインにまで影響を与える指導的な役割を果たしているからである。しかし、意外なことにマウンテン・ビューの場合は、すでに名声を確立したオームステッドが設計したにもかかわらず、その後の墓地景観に影響を与えていないのである。開園から約一世紀が経った1960年代に出版された霊園のパンフレットには、オームステッドの設計について一言も触れられていない。オームステッドの提案には地方性に着目した斬新なアイデアが表明されているにもかかわらず、なぜマウンテン・ビューが墓地景観で——少なくとも西部の半乾燥地帯に

おける——新機軸を打ち立てられなかったのか。ここに西部という土地の特殊性をみることができる。田園墓地運動の西部への進出における終着点としてのマウンテン・ビューの問題点を取りあげ検討したい。

1863年、サンフランシスコの東、ゴールデンゲート橋のたもとに広がるオークランドに、マウンテン・ビュー霊園の母体であるマウンテン・ビュー・アソシエーションが結成された。その目的は、「死者の思い出のために、騒々しい町から離れた広大な敷地を永遠に聖別し、そこでは安息の場に設けられた醜い柵を取り払い、美しい自然に囲まれた場所にする³⁵⁾」であり、田園墓地設立の目的にはもはや市街地の醜悪な墓地改革などの社会問題は完全に欠落していし、より関心が向けられているのは、流行の景観スタイルである。

霊園開設の1865年に発行されたパンフレットは、「高価で往々にして不釣り合いな木製の手すりや、石や鉄の柵さえもこれまで墓地によく設置されたが、東部のより最近の趣味良い霊園では現在では撤去されている」と最近の霊園の傾向に触れている。³⁶⁾その権威付けにシンシナティのスプリング・グローヴのストラウフの意見がこのすぐ後に引用されている。また、ワシントン・アーヴィングの有名な「なぜ墓地に不必要な恐怖を与えなくてはならないのか」という一節も引用されている。しかし、墓の周りから柵を取ることを奨励する文章がこの後にアーヴィングの言葉として引用されているがこれは間違いで、アーヴィングは柵の撤去については何ら述べていない。このパンフレットは、これまで使い古された田園墓地の常套句と、墓地景観に関する新しい意見を無造作に寄せ集めたに過ぎない。しかも、通常この種のパンフレットには設立意義が説かれた開園式でのスピーチ原稿が掲載されるはずだが、これには最後にスプリング・グローヴの演説がそのまま掲載されているだけである。これだけでも、田園墓地誕生から30年を経て、人々の墓地に関する関心がかなり薄れてきたことがうかがえるが、霊園の理事たちはそれでも、西部一の美しい墓地をつくりたいと

いう意欲をもち、1863年から金鉱山の支配人となりカリフォルニアに滞在していたオームステッドにその設計を依頼した。セントラル・パークで岩や沼地の不毛な土地を魅力的な緑の空間に変えたその手腕がかわれてのことだった。オームステッドは、現地を調査して1865年に理事会に「カリフォルニア州オークランドのマウンテン・ビュー霊園設計案の序文」を送っている。これは、オームステッドが墓地のデザインに関する考え方を表明した唯一のものとなっている。

ピクチャレスクな景観の拒否

オームステッドの霊園設計はどのようなものであったか。彼はまずサンフランシスコの特殊な気候風土を問題にした。一年の半分はほとんど雨が降らない半乾燥地帯で、「世界中どこを捜しても、実際の砂漠を別とすれば、ここ以上に自生の植物が限られたところはない」とその特殊性を強調している。

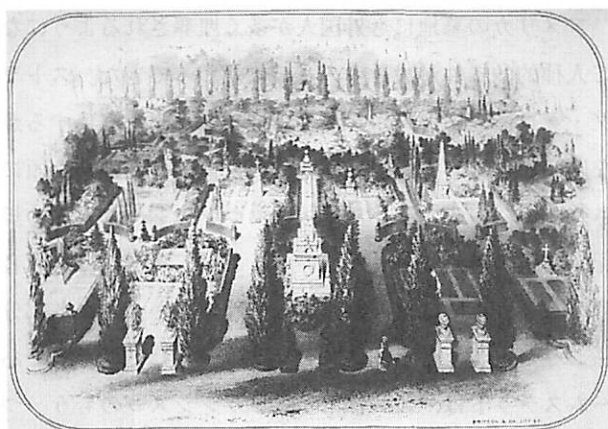
オームステッドは、1863年ニューヨークからパナマ経由でカリフォルニアにやってきた。途中、パナマ鉄道の列車から見た熱帯植物に圧倒され、その「うっそうと茂った木々の目も眩むほどの華麗さ」の印象も覚めやらぬままサンフランシスコに上陸した。しかし、そこで目にしたのは、「木も灌木もまったくないほとんど荒涼とした」風景だった。これまで見慣れてきた風景とはまったく異なる土ぼこりの舞う、殺伐とした、砂漠の風景との遭遇だった。しかもサンフランシスコは1850年以來の大干ばつに見舞われていた。

オームステッドは、サンフランシスコにはもはや東部のようなピクチャレスクな田園墓地をつくるのにはふさわしくないと判断した。さらに、東部の田園墓地にこだわれば、人工的に地形を変え、頻繁に散水を行わなくてはならず、膨大な資源・労働力・コストがかかり賢明ではない。したがって、発想を転換してまったく新しいアプローチをとるべきであると主

張した。

ピクチャレスクな景観は、自然な景観美を前提にしているため、墓地では記念碑や墓石は自然なデザインの邪魔になる。しかも、マウンテン・ビューは大部分平地なので、その意味でもピクチャレスクなデザインは難しい。そこでオームステッドの案では、平地の道は直線に引き、両側に木を植えて並木にしている。斜面には曲線を用いているが、これは登りやすくするためである。東部の田園墓地では曲線をえがく園路が特徴であり、これが自然と考えていたが、オームステッドは自然の方が人間の手になるものよりもより真実であり美しいというが、人間の才能も技術も神が生み出したもので同じく自然であると考えていた。ピクチャレスクな景観は人間の手が増えられた時点で「純粹な自然」ではなくなるが、墓石も記念碑も人間の気持ちを伝えるためのものであり、人工的なものであることを隠す必要がないというのである。さらに、美しいピクチャレスクな庭園式墓地の欠点として、庭園が優先し、墓地は二次的となり死者への配慮が損なわれる結果となっていると批判している。

パストラルな景観のまとめ役として重要であった芝生は、半乾燥地域に



図版2 オームステッドによるマウンテン・ビューの墓地区画のデザイン

は費用もかかり不適切とオームステッドは考えた。芝生の代わりに彼が提案したものは、各々の墓地をイトスギと灌木で密に囲み、私的な空間をつくり、地肌が広がる風景が視界に入らないようにすることだった。(図版2)

オームステッドがカリフォルニアの地に求めたものは、東部の田園墓地がモデルとしたイギリス庭園を捨て、その土地の気候・風土に適した新しいモデルを打ち立てることであり、「応用」ではなく「革新」であった。

自然の多様性から社会の多様性へ

こうしたオームステッドの革新的な案は、サンフランシスコの気候的な特殊性だけでなく、社会的な特殊性をも考慮に入れたものであった。急速に発展しつつあった新興都市サンフランシスコには、独身者や旅行者など一時滞在者が多く、彼らはさまざまな団体に属しているので、それぞれの団体のための埋葬区画もプランに含められた。カトリック教徒や、中国人のための区画など埋葬者の多様な欲求に応じたプランが提案された。もともと多様性はピクチャレスクな景観の基本的要件であったが、初期の田園墓地においてそれは地形的、植物的多様性であった。しかし、19世紀後半になると、アメリカの墓地にも外国人が多く埋葬されるようになり、それを反映して人種的多様性が設計者の意識に加わってきた。ストラウフも、スプリング・グローヴに海外から多くの種類の樹木を収集するが、これは植物学的な関心からだけでなく、埋葬者の人種的多様性も念頭にあったことが指摘されている³⁹⁾。また、1873年版のマウンテン・ビューの規則には、埋葬者の記録に肌の色が加えられている⁴⁰⁾。しかし多様性は、死者を弔うと言う共通目的という点では統一がなければならなかった。各部分の秩序ある相互関係こそが重要だとオームステッドは主張していたのである。

またオームステッドは、新興都市サンフランシスコのもう一つの問題点は、審美的な判断力を持ち人々の「趣味」を正しく導く指導者が不足し、

公共心が忘れられ、奇抜な行為も注意を受けることがないことを指摘している。したがって、マウンテン・ビューは、人々に正しい「趣味」—美的センス—を教える場でもあったのである。これは、初期の田園墓地が、新生共和国の良き市民—正しい「趣味」・価値判断をもった人間を育む場としてとらえられていたことを思い起こさせる。オームステッドの意見は、全体の景観美をそこねないために個々の墓地所有者の「趣味」を規制する霊園の規則として取り入れられた。しかし、都市公園も登場する19世紀も後半となると、どこまで人々が墓地にこのような積極的な役割を期待したか疑問である。

オームステッドの提案は、部分的に実行に移された。カリフォルニア滞在の2年間に、彼はカリフォルニア大学バークレー校やサンフランシスコの公園の設計などを手掛けたが、マウンテン・ビューだけがカリフォルニアで部分的にも実行された唯一の例となっている。実際の景観では、図版2の木と灌木で囲った区画の案は実行されず、オームステッドが強調した半乾燥地域に適した革新的な発想は結局生かされなかった。霊園の13人の理事たちは、ニューイングランドやニューヨークからの移住者たちであり、東部の景観を捨てきれなかったものと推測される。約20年後に関わったスタンフォード大学の例にも示すように、依頼主たちのニューイングラ



図版3 20世紀初頭と思われるマウンテン・ビューの景観

ンドの景観への強い執着は、結局高い費用をかけても、また、乾燥期にみじめな姿になろうとも、オームステッドの提案を蹴って芝生を採用させてしまったからである。(図版3)

おわりに

現在のマウンテン・ビューには、中央の直線のメイン・アヴェニューなどオームステッドのデザインは今でも残っており、現在の霊園のパンフレットは、オームステッドが設計者であることを宣伝している。しかし、園内は彼のプランとは異なり、芝生が植えられている。20世紀になると、人間の技術力でどのような景観も可能となり、マウンテン・ビューもついに創設者たちが夢に描いた通りのパストラルな景観を実現した。しかし、皮肉なことに、それ故にマウンテン・ビューはどこにでもあるようなメモリアル・パークとなってしまった。これは、田園墓地の宿命でもあり、いわばヒット商品である田園墓地は、あちこちに同じような墓地を生み出し、結果的に墓地に関する人々の関心を低めてしまった。

オームステッドは、これ以降二度と墓地のデザインは行わなかった。というのも、彼にとって景観デザインが一番の障壁になったのは乾燥した特殊な気候というよりも、景観の邪魔になる墓石自身だったからである。彼は後に、「記念碑に条件をつけない限り、墓地のデザインはもうできないと思う。その条件を受け入れるのはクェーカー以外いないだろう⁴¹⁾」と述べている。これこそ、風景庭園を理想とした田園墓地に内在する本質的矛盾をつく意見であり、皮肉にも墓地の将来のモデルを予測するものであった。墓石のない墓地という新たなモデルとしてフォレスト・ローン・メモリアル・パークがカリフォルニアに登場するには、さらに半世紀が必要であった。

註

- 1) Gunther Barth, "The Park Cemetery : Its Westward Migration," *American Public Architecture : European Roots and Native Expressions* (University Park, PA : Pennsylvania State University, 1989).
- 2) 本論文は、シンシナティとサンフランシスコで収集した墓地の定款、案内書、新聞・雑誌記事等の一次資料を基に分析・執筆を行った。西海岸の墓地に関しては、特に2001年8月にサンフランシスコで開催された墓石研究学会 (Association for Gravestone Studies) の西海岸大会を利用し現地調査、資料収集を行った。
- 3) Blanche M. G. Linden, *Spring Grove : Celebrating 150 Years* (Cincinnati : Spring Grove Cemetery & Arboretum, 1995), 4.
- 4) Blanche Linden-Ward, "Spring Grove : The Founding of Cincinnati's Rural Cemetery, 1845-1855," *Queen City Heritage*, 43-1 (Spring 1985), 19.
- 5) Linden, *Spring Grove : Celebrating 150 Years*, 8-9.
- 6) Ibid., 9 および Linden-Ward, "Spring Grove ; The Founding of Cincinnati's Rural Cemetery, 1845-1855," 22.
- 7) *Cemetery of Spring Grove : Its Charter, Rules, and Regulations, also an Address Delivered at the Consecration, by the Hon. John M'Lean, and a Catalogue of the Proprietors on the 1st of May 1849* (Cincinnati : Gazette Office, Wright, Fisher & Co., 1849), 29.
- 8) Ibid., 5.
- 9) 墓地用地を金銭で購入して所有するという例を、旧約聖書「創世記」(第23章)のマクベラの墓に辿る話がマウント・オーバーンの奉献式の演説で述べられたのもそのためである。(詳しくは拙著「アメリカ田園墓地の研究」(玉川大学出版部, 2000年), 170-173を参照)。
- 10) Linden, *Spring Grove : Celebrating 150 Years*, 16.
- 11) Ibid., 18.
- 12) Ibid.
- 13) Ibid., 20.
- 14) Ibid.
- 15) Ibid. 12
- 16) Alexander von Humboldt, *Cosmos : A Sketch of the Physical Description of the Universe*, translated from the German by E. C. Otte (1850), 2, reprint (Baltimore : The Johns Hopkins University Press, 1997), 103-4.
- 17) Noel Dorsey Vernon, "Adolph Strauch : Cincinnati and the Legacy of Spring Grove Cemetery," William H. Tishler, ed., *Midwestern Landscape Architecture* (Chicago : University of Illinois Press, 2000), 14.

- 18) Ibid., 13.
- 19) Ibid., 15.
- 20) Linden, *Spring Grove : Celebrating 150 Years*, 21.
- 21) Don Heinrich Tolzmann, ed., *Spring Grove and Its Creator : H. A. Rattermann's Biography of Adolph Strauch* (Cincinnati : The Ohio Book Store, 1988), 22.
- 22) Barbara Rotundo, "Cemeteries for the Dead and Living," *Experiencing Albany : Perspective on a Grand City's Past*, ed. Anne F. Roberts and Judith A. VanDyk (Albany : The Nelson A. Rockefeller Institute of Government, State University of New York, 1986), 202.
- 23) Linden, *Spring Grove : Celebrating 150 Years*, 36.
- 24) Tolzmann, 18.
- 25) Linden, *Spring Grove : Celebrating 150 Years*, 36.
- 26) Tolzmann, 18.
- 27) Ibid.
- 28) Vernon, 9.
- 29) Hermann Ludwig Heinrich von Puckler-Muskau, *Hints on Landscape Gardening*, trans. Bernhard Sickert, Bernhard Sickert, ed. Samuel Parsons (Boston : Houghton Mifflin, 1917), 80.
- 30) Barbara Novak, *Nature and Culture : American Landscape and Painting 1825-1875* (New York : Oxford University Press, 1995) 231. 絵画における「細部」と「全体的効果」は本書を参照のこと。
- 31) Virginia Scott Jenkins, *The Lawn : A History of an American Obsession* (Washington and London : Smithsonian Institution Press, 1994), 27.
- 32) Ibid., 29.
- 33) *Cemetery of Spring Grove : Its Charter, Rules, and Regulations*, 5.
- 34) Ibid., 20.
- 35) *By-laws and Rules of Mountain View Cemetery Association* (Oakland : Mountain View Cemetery Association, 1873), 5.
- 36) *Organization of Mountain View Cemetery Association, Oakland, California ; Officers of the Corporation, Rules, Regulations, and By-laws* (San Francisco : M. D. Carr & Company, 1865) 30, 31.
- 37) Frederick Law Olmsted, "Preface to the Plan for Mountain View Cemetery, Oakland, California," May 1865, in Victoria Post Ranney, ed., *The Papers of Frederick Law Olmsted* (Baltimore and London : The Johns Hopkins University Press, 1990), V, 473-482. に掲載。この後にプランの説明 (482-487) が続いている。

38) *Ibid.*, 11.

39) Linden, *Spring Grove : Celebrating 150 Years*, 48.

40) *By-laws and Rules of Mountain View Cemetery Association*, 15.

41) *The Papers of Frederick Law Olmsted*, 453.